

野崎韶夫先生を悼む

安井亮平

野崎先生が6月20日に永眠された。享年89歳であった。

ロシアの演劇やバレエの研究や紹介、普及につくされた偉大な功績について、ここで改めて述べる必要はないだろうし、それには私などよりももっとふさわしい方がいらっしゃる。

特にこの20年余り親炙をえ、年ごとに先生の偉大さを感じなくなった私にとって、人生の師を失った寂寥は底知れない。

この空白感をどう表現したらよいのか、解からない。

今はただ、哀悼の念をこめ、葬儀の際述べた弔詞を再録させていただく。

野崎先生

先生に私が初めてロシア語を習ったのは、もう40年ほど前のことになります。

先生は、ロシア語の誤った発音や解釈を決して容赦されない、厳しくとても怖い先生でした。それにもかかわらず不勉強な私たちは、不正確なロシア語で先生を大いに悩ませましたが、その時には、ロシアやバレエや演劇についておたずねすれば、先生は機嫌を直されるとの言い伝えが、露文の学生にありました。

確かに先生はロシアとバレエと演劇を心から生涯愛されました。

1928年5月から32年10月にいたるモスクワやレニングラードでの留学、その後、満鉄での『東方評論』などのロシア語での日本文化紹介の仕事、戦後、3年半におよぶ中央アジアでの抑留後、早稲田や慶応外語での30年近くのロシア語とロシア演劇、バレエの教授、数々のすばらしくまた正確な戯曲や演劇理論の翻訳などなど、つねに一貫して、卓越したロシア語の力と深いロシアとロシア人についての知識を生かして、ロシアの文化を日本に、そして日本の文化をロシアに伝えようとされました。

ロシアのバレエや演劇についても、最後の著書『ロシア・バレエの黄金時代』（1993年11月20日発行、新書館）にいたるまでの幾多の著書ばかりでなく、東京バレエ学校の設立に関わられたり、日本・世界バレエコンクールの審査員を務められたり、来日するロシアの演劇人やバレエ関係者を親身に世話されたりして、実際面でも大きく寄与されました。

これらの仕事を、先生は実に几張面に、一切手抜きをされることなく、常に完全主義でなされたのでした。終生、実に潔癖にまっすぐと、ごまかさないうで、生きることを貫かれました。「蘆原英了氏を悼む」という文章で、先生は、永年のバレエ

研究の友、蘆原氏について、「学究的な潔癖さは無類だった。他人が間違っただけを書いたり、言ったりするのは我慢がならなかったらしい」と書いておられますが、その文章はそのまま先生にぴったりです。

早稲田を停年で1976年3月にやめられてから、永年にわたって集められた、ロシアのバレエや演劇についての貴重な蔵書や資料をすべて、早稲田の演劇博物館に寄贈されました。その数は今日までに3000点。その大部分は、先生自身が整理カードを作られ、それに、日本語訳をつけられました。その上、コレクションを整理する費用まで寄付されるほどの徹底ぶりでした。いかにも先生らしいと、ただただ感服するばかりです。最後にお会いした時、それは亡くなる1週間前のことですが、まだ1000冊残っている、これは自分で整理しなければならない、と語っておられました。

亡くなるちょうど10日前のことです。今月10日に、足がかなり不自由で体調が芳ばしくなかったにもかかわらず、往復とも車で、上野までモスクワ音楽劇場のバレエをご覧になりに出掛けられました。翌11日は、恒例の「野崎会」という集まりで、ご親族一同とお会いになりました。さらに、次の日、12日には、ロシアに留学された時の親友トペハ夫妻のお子さんで日本学者のグリゴリエワさんと、最近野崎先生の生涯と仕事について文章を書いたサブリナさんを、先生お気に入りの新宿の中華料理店に招いて懇談されました。私も幸いに列席させていただきました。この時先生は元気に、大好きな中華料理を平らげられていました。

先生がもっとも大切にされていた、ご家族とロシアとバレエ。これらと、不思議なことに、自からの死をあるいは予感されていたのか、立派に別かれをなされ、そして安らかな死を迎えられたように、今感じます。

実に見事に生き、見事に亡くなられたのだと、最後の最後まで、いかにも自覚的意志的に生きられた先生らしかったと思います。これから私たちが生き、老いていくのに、見事な手本を示していただきました。先生とお別れするのは悲しい。しかし同時に一生の師を得た幸せをも、今感じ始めています。

もっと生きていていただきたかった、もっといろいろ伺っておけばよかった、との思いはしきりですが、それはもう繰り返すでしょう。

先生、肉体から解き放たれたこれからは、永年持病のためお出かけになれなかったロシアを訪れて、どうぞお好きなだけ、バレエや演劇をお楽しみ下さい。ご冥福をお祈りいたします。

安井亮平

1995年6月24日